

出稼ぎはねぐならネ

——出稼ぎ取材班からの報告——



清水 弟

目次

- 1——79人の犠牲者
- 2——飯場で働らく
- 3——タコ・出稼ぎ対策
- 4——女しかない村
- 5——格差のメカニズム
- 6——機械化貧乏
- 7——兼業化の波
- 8——崩れる農村
- 9——空転する対策
- 10——ふえる犠牲者
- 11——専業農家への道
- 12——出稼ぎはねぐならネ

1——79人の犠牲者

「出稼ぎの犠牲者、一年間で79人」という記事が出たのは、48年4月のことだった。秋田にきて、一カ月の新参者にとって、この数字は驚きだった。なにしろ、年間の交通事故死者が160人程の県である。交通事故死の半分にあたる人々が、県外の、都会の灰色の街で、出稼ぎで死んでいく。これはどう考えても異常でないか。しかも、死者の8割が、病死だ。病を背負い、本業の農業を離れて、出稼ぎにと出ていく人たち。一体、なにが出稼ぎを生み、こんなに多くの犠牲者を出してまでも、人々を都会へと駆り出すのか。不思議なことに、出稼ぎの犠牲者に、地元の人ほとんどショックを受けていないようにみえた。県庁職員も、農民も、出稼ぎはしごく当然のこととでもいいたげに、犠牲者の数にもマユをひそめるだけだ。冗談じゃない。なにかが、きっと起っているはずだ。出稼ぎの取材が始まった。

2——飯場で働らく

出稼ぎを取材した記事、ルポは少なくないが、多くはまったく第三者の立場から報道していて、いたずらに外面的な現象に追われている。稼いだ金で、中古車を買う出稼ぎ青年をみて、レジャー型の出稼ぎと分類しても問題を正しくとらえたとはいえない。僕は、東京で、出稼ぎ者と一緒に働き、飯場に寝泊りする方法を選んだ。土方は、学生時代のアルバイトで経験があり、体力には自信もあった。

この飯場を探すのに苦労した。取材目的を話しては、悪条件の下で働く出稼ぎの実態は分らないだろう。身分を隠し、コネで就職することにした。秋田県の出かせぎ互助会が出した就労先名簿があ

る。互助会で、県の広報や地元紙を送るためにまとめた、いわば会員名簿だ。清水建設に勤める友人に、三千以上の職場から、下請け、孫請けを探して、口をきいてくれるよう頼んだ。二週間後、名簿には、下請け、孫請けはおろか、孫の下請けもない、という返事がきた。出稼ぎ者は、文字通り、底辺で働いているのだ。

別な方法で、48年10月から相模原市のS工務店と東京都目黒区のI建設で働いた。S工務店では、大学院の学生と、身分を偽ったため、職安が警察<!/>の人間でないかと疑われ、二時間近い社長の面接試験を受けた。I建設には、新聞記者として働いた。

社長が秋田出身、社長のおくさんも秋田、専務も社員も同族の典型的な中小企業だ。社長は「秋田のヤツしかとらネ」といいきる。食事も、秋田の人が好む、ガッコ<漬物>や塩味の濃い料理が多く、飯場の言葉もすべて秋田弁。相模原市の中で、ここだけは、秋田藩の飛び地のようだった。

同郷意識で結ばれた職場は、出稼ぎ者にとって確かななじみやすい。が、同郷であることは、不安定な雇用関係を裏付けてもいる。

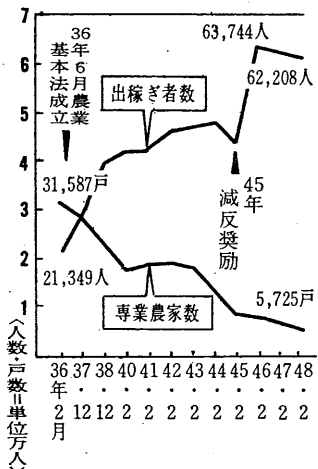
S工務店の仕事は、むずかしいものではなかった。鉄筋の曲ったのを直し、コンクリート壁の残骸を

電気ドリルで崩す。2トン積みトラックの荷台につまめた大型コンプレッサーを動かさせられた時は、少しあわてたけれど、素人にとって格別に危険とは思えない。一緒に働いたセイさんは63歳、体力を惜しむようにユックリ動いていた。出稼ぎ23年のベテランだ。監督が姿を消すと休んでしまう。「出稼ぎは金になるでしょ」というと、「土方なんてやめな、若いんだから」といわれた。

ここでは、秋田県の出稼ぎ者10人が働いていた。多い時は、30人になる。が、工務店の従業員は、社長の家族を除くと、2人しかいない。出稼ぎ者でもっている会社だ。仕事も、建設現場の後片付けなど、簡単なものから、土方、大工などで、特別に資格を必要とするものはない。

I建設は、逆に、ベテランぞろいだった。下水道工事というのは、直径1m重さ1トン近いヒューム管を、一定の傾斜で並べて埋めていく作業で、配管は配管工の資格がいる。この資格を持っているのが、経験15年というベテランの出稼ぎ者だ。社長の信任も厚く、仲間も、元請けの大学卒も仕事ぶりを高く評価していた。実際に見ていると、すべての作業がまるでオートメーションのように整然と進められていく。ヒューム管を、丸太2本を使い、たった3人で動かす方法など見事という

秋田の出稼ぎ者と専業農家の数



出稼ぎ者の飯場



△東京都目黒区▽

ほかなかった。出稼ぎもここまでくれば本職並みだ。

社長は青森出身の人だった。仕事にはうるさい。バクチと酒でのケンカを戒しめ、それが出稼ぎ者にも好評だった。「昔の飯場は、バクチ、ケンカがつきもので…」と社長は笑っていた。社長の強い指導のもとで、出稼ぎの男たちは、技術を磨いたのだろう。深さ4mほどの下水溝も、土砂崩れを防ぐ、くいを打ちこみながらの、堅実な作業だった。カネをとっても、体をこわしたら何にもならん、が社長のモットーだ。ベテランの出稼ぎ者に米造りと比べすと「なあに、米だば、ずうっとむずかしいもんだ」。資格がある配管工も、農業に比べれば、配管は出稼ぎ仕事でしかない。

出稼ぎ者の仕事や飯場は、想像していたよりはまじだった。しかし、中小企業の寮に比べたら、飯場の生活は、仮設のフロ、便所、洗面所、食堂から貸しぶとん屋のふとんまで、どれも数倍粗末で汚れてもいた。しかし、出稼ぎ者は、こんな労働環境に不満をいわない。多少の労働条件よりはカネという意識もあろうし、知人・友人の紹介という雇用関係も、文句をいえない体質を作っていると思える。

工事現場で



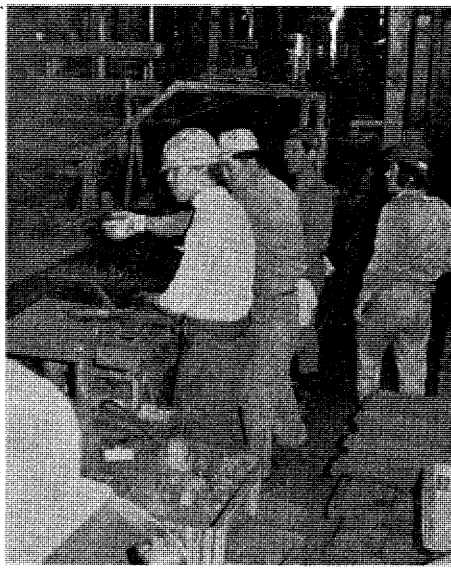
△横浜市西区▽

3 ————— タコ・出稼ぎ対策

雨が降って、仕事ができなくなった時の出稼ぎ者は惨めだった。相模原市の飯場で、この惨めさを経験した。とにかく、三度の食事を食べる以外、飯場から一步も外へ出ようとしないのだ。雨が降って仕事がなくとも、外出すれば、余計なカネを使う。カネを稼ぎに出稼ぎに来て、カネをむだ使いはいけない。出稼ぎの男たちは、そうやって、ひたすらふとんの中で、眠ろうとする。仕事を休んで、日当はもらえなくとも、食費は引かれるから、自分の足を自食するタコと同じだという。「雨の日はタコ」だ。

じとじとするプレハブの飯場。ばくちを打つでも酒を飲むでもなく、ふとんにもぐっている出稼ぎ者。枕の下から、家族の手紙をそと取り出して読み、それが終わると古い週刊誌を読みなおす。笑いも、話し声もなく、雨の音だけがやたらとうるさい。夕方遅くなって、同じ部屋の二人がパチンコに行った。1時間ほどで帰ってきた。飯場の黄色い裸電球を見ながら、男たちはじとこらえていた。一人が、おどけた調子で「カアチャンに会いてえ」といった言葉は、どうしようもない情

工場で



△東京都日野市▽

がこもっていて、お愛想に笑った仲間も、チラリと真剣な顔になっていた――。

出稼ぎという言葉には暗いイメージがつきまとう。楽しい出稼ぎもあるという。そうかもしれないが、やはり、僕が体験した出稼ぎの生活は寂しくつらいものだった。飯場が、鉄筋のビルになりオリンピック選手村のように豪華な食事が出ようと、出稼ぎが楽なはずはない。アンケートをとると、人間的な接触と、その機会を一番求めている出稼ぎ者。それを解決するのは、出稼ぎをなくする以外に道はない。秋田県は、「日本一出稼ぎ対策が進んでいる」といわれる。出稼ぎ者の安全就労を目指した出かせぎ互助会は45年に発足し、出稼ぎ者の約7割、4万人を組織していると公称、東京をはじめ、静岡、大阪、北海道に出稼ぎ相談員15人を置いている。賃金不払い、不当解雇、労働条件の一方的変更など、出稼ぎ者をめぐるトラブルの解決で成果は一応上っている。しかし、労働者の末端にいる、出稼ぎ者の地位を向上させ、都市労働者として定着することにはつながっていない。むしろ、出稼ぎ者として定着させることを目指しているような気がしてならない。「安心して働ける出稼ぎ」という歌い文句はそんな事情を裏付けているのではないか。そこには、出稼ぎを解消するという視点はすっかりなくなっている。

4 ―――― 女しかない村

出稼ぎが原因で、病気を苦に自殺した人の遺族を訪ねた。秋田県雄勝郡羽後町仙道。48年12月のことだった。湯沢市から、西に入って約2時間。ジープでやっと通れる山道を行くと、2m以上の雪にすっぽりと埋まった農家が並んでいる。雪おろしをしているのはみんな女だった。男たちは、出稼ぎに行っていない。雪から家を守るのは、もう

女の仕事になっていた。

今年、秋田は史上最高の豪雪だった。雪おろし作業で死者が続出、数十戸の家が雪の重みでつぶれた。女手に、豪雪は痛かった。平鹿郡平鹿町の主婦は「立ちすくんでいる目の前でパリーン、パリーンという音がして、台所のガラス戸が一枚、また一枚割れていく。足がガクガクふるえます。夫は出稼ぎ中。雪おろしをするあとから雪がつもっていく恐ろしさは、いいようがありません」と訴えていた。

小学生は、夫が出稼ぎ中カアちゃんの気嫌が悪くなるという。夫のいない不安、不満。出稼ぎ留守中は、夫がいるときより明らかに栄養摂取量がへるという、調査結果もある。

近ごろは、その女たちも、出稼ぎに行き出した。近くの誘致工場にパートで勤めている人も多い。父親も、母親もいない農家は、都会の団地より寂しい。両親が出稼ぎに行くため、玄関を釘付けした家の前で、親類にあずけられた女の子が遊んでいた。この女の子は、両親が出稼ぎしなければならぬ農業を、一体どうみているだろうか。

取材を通じ、何度か、子どもたちの出稼ぎ文集を読んだ。ぜひ読んでみてほしい。シミからシミまで、出稼ぎに行った父親、母親がいない寂しさにあふれている。寂しさの中で子どもたちが、じっと耐えている姿がはっきり目に浮んでくる。これは、もう戦争としかいいようがない。

5 ―――― 格差のメカニズム

農民が出稼ぎを始めると、それこそ体ごと吸い込まれるように出稼ぎにのめっていく。きっかけは何でもよい。農機具を買い、家を新築するための借金、子どもを大学へ進学させるため、一度、カネを必要として出稼ぎに入ると、出稼ぎで得た収

入は、翌年も出稼ぎに誘い出す。背景には、農業だけでは食べていけない現実と、農業と他産業、都市と農村との構造的な格差がある。

簡単にいうと、秋田県の農家は1戸平均1.1haの田を持っている。米は1haから100俵とれるとしても、収入は、新米価でも156万円。必要経費を抜いた純益は80万そこそこだ。米以外の野菜、養鶏、酪農などは、価格が不安定で収入には大きな波があり、たびたび、大きな赤字になる危険がある。農業以外の収入が、農業を支えるために求められる。主人、長男が会社、工場で働き、主婦もパートに出る。収入は安定しているが、金額は安い。パートでは、一日働いても1,300円から1,500円という相場だ。ここから一步ふみ出そうとすると、月収10万円以上の出稼ぎしかない。

農業だけでは生活がむずかしい上に、他産業との格差は絶望的に大きい。表1は、日産自動車の出稼ぎ者の賃金と、農作業請負いの賃金を比較したもの。41年の出稼ぎ賃金は3万6千円、稲刈りは日給男908円。48年には、出稼ぎ賃金が12万円、稲刈りは1,800円。「出稼ぎで1日働けば、野良仕事3人分のカネが入る」とうそぶく出稼ぎ者もいた。賃金の面からみた格差は、出稼ぎを一度でも経験したものには捨てがたい魅力となる。

農家の賃金ともいえる、農産物価格をみると、他

産業の賃金との格差も大きいことがわかる<表2>。農業に展望をなくする青年はほとんどが、この事情を知っている。耕作面積を拡大できず、土地の生産性もあげられず生産物の価格上昇にも期待できないなら、農業の職業としての魅力はどこに求めればよいのか、そう問われて、土に生きる意義を説くことはまったく説得力を欠いている。もう一つ、同じ職業でも、秋田と東京では賃金が違うという格差がある。土方をやっても、東京の日給4,5千円に比べ、秋田は2千円。農林、建設、労働三省が毎年協定する公共事業請負いの労賃すら、東京の日給に比べ秋田は平均1,000円ほど低い。同じ仕事をするなら、東京に出た方が得だということになる。秋田の出稼ぎ者は、この格差に反対をしているが、政府は、格差をなくそうとしていない。労働力を都会に集中させるため、格差をむしろ積極的に広げようとしているようだ<表3>。

農産物価格で、農業そのものに対する希望を失わせ、農業と他産業との賃金格差、都市と農村の格差が農民を、農業外へ、都市へと追いやっている。三方から、追われて、農民が出稼ぎに行くのは、農業がそのまま、崩れていく姿でもある。

表-1 出稼ぎ賃金と稲取り賃金

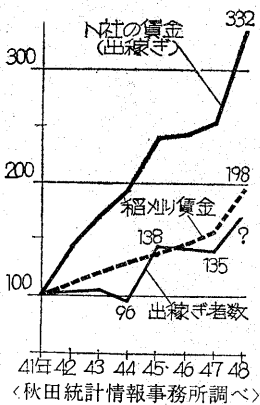


表-2 出稼ぎ賃金と農産物価格

	42年	48年	上げ幅
K自動車<東京>	日給 1,300円	3,600円	176%
米<生産者>	3等150 ^{キロ} 19,521円	25,752円	57
牛乳<生産者>	キロ 44円93銭	63円33銭	41
鶏卵<生産者>	キロ 190~200円 1個~14円	220~230円 16円	14
豚肉<生産者>	枝肉上物 キロ361円	500円	40
秋田<土建業>	日給 900円	1,500円	66

<羽後町三輪出稼者組合調べ>

表-3 49年度 三省協定・労務者の基本賃金

	秋田・青森・山形	東京
土工	最高 4,780	6,010
	標準 3,980	5,010
	最低 3,180	4,010
重作業	<同上> 3,920	5,220
	3,270	4,350
	2,620	3,480
軽作業	<同上> 2,630	3,680
	2,190	3,070
	1,750	2,460

出稼ぎは、一方で、出稼ぎのための出稼ぎをも生み出して行く。10月中に、稲刈りを終えて出稼ぎに行くために、農家は争うようにコンバインを、乾燥機を導入する。春は、田植えを手早くすませるための田植え機もほしい。一台、二台とふえる農機具の借金は、借金を返すための出稼ぎへつながらる。湯沢市の若い農民は、「家の中にあるモーター付きの農機具を数えたら20台あった」と驚いていた。

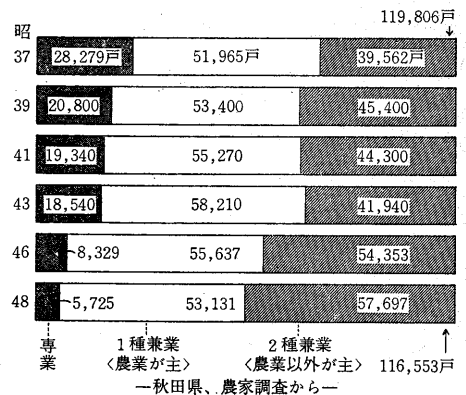
一年間に2・3日しか使わない農機具。一台100万円以上する大型コンバインを、各農家が個人で所有する不合理。機械化貧乏ということばは、そんな農民を皮肉っている。が、農機具メーカーはテレビで派手に宣伝し、毎年、乗用車並みに新型<！>を発表して農家に売りこんでいる。「豊作をあなたに、ぐーんと性能がアップして新登場」。確かなことは、どんなに農機具をつぎこんでも、耕地面積はふえず、増収は望めないことだ。機械は、農民を農業から離す時間をふやし、農外収入を得る可能性を保障する。そして、それは多くの場合、出稼ぎだ。

出稼ぎのための機械化は、機械化のための出稼ぎにつながり、ぐるぐる回りながら、農民は農業から次第に遠ざかっていく。

機械化のほかにも、一枚の田をたて100m、横30mにする大規模圃場整備が契機で出稼ぎを始める農民も多い。工事のため、休耕して通年施行するからだ。構造改善事業や、経営規模拡大のため借りた農業近代化資金の返済に追われ、出稼ぎに入る人も少なくない。いずれも、農業をたてなおすための施策が、裏目に出ている。

米どころ秋田で、今年、ヘリコプターで病虫害の航空防除をやる田は、のべ12万ヘクタール。全国一の面積だ。農薬散布の健康に与える影響、大面積防除の効果など利点もあるが、実際は、農家の「めんどくさい」という気持ちが、航空防除をふやしたといわれる。農業は、どんどん人手を離れ、農家の兼業化は、過去10年の間に、過去100年以上と思えるほど激しく変化している。

表-4 秋田県の農家戸数



ここで問題なのは、農家全体の数にはほとんど見るべき変化がないことだ。農業基本法の目指した、農民の六割を他産業へ向けるといふ政策は完全に失敗し、兼業化という形で、農業内部における階層分化に転化してしまった。

とくに、生産調整といって、休耕を奨励した45年以降の、兼業化の増加は甚だしい。若い農民が「減反政策が農民に与えた侮辱は決して忘れない」と話していたのを思い出す。多くの農民が、兼業化という、脱農業の道を選ばせられながらも、農民であることをやめようとしていない。虫ににくいあらされ、ボロボロになった木が、倒れることを拒んでいるかに見える。これを支えているものは何だろうか。たとえ、30アールの田でも、米と野菜を作れば、食べていけるという土地の基本的な生産性なのだろうか。戦時中、食糧危機を経験した人間なら、少なくとも「食べていける土地」に対する人間の執着は理解できよう。この土地に対

する農民の執着は、耕地の拡大による大型機械化が単なる机上の空論でしかないことをあばき出した。

8 ————— 崩れる農村

どこでもよい。農村を歩いてみればすぐわかることだ。冬、雪に埋もれた田はともかく村の通りには人通りがほとんどない。出稼ぎだけでない。主婦の工場通いも、すっかり定着し、とにかく、村からは人がいなくなったのだ。こんな詩がある。

——ババひとりの冬 長里 昭一

誰れが来え

誰れが来てけれえ

毎日 毎日

たいぐづでたいぐづで

〈童だ〉 学校さア

〈母親〉 大館さ行ってしまえば

あどア ババひとり

誰れがア来てけれえ

……

昨年だば作悪くて

二十俵も米ベアッコだとて

〈父親〉 初めて東京さ出稼ぎさ行った

オラもだまっていられなエどて

母親、大館さ仏壇こしゃえに行ってしまった

ほんとエ、ほんとエ

そしえば ババひとり

たいぐづで たいぐづで

誰れが来てけれ

誰れが来てけれった!

ババひとりなば やんだった

〈ベアッコ=少ない、童=わらし〉

農村が廃虚のように寂しいのは、夏も同じことだ。田植えが終わるまでは、それでも賑やかな村も、

8月には、ごっそり人がいなくなる。除草剤も害虫防除も、まとめて他人に頼んで、人々は、近くの工場や、建設現場に日稼ぎに行く。一面の緑の田で、人影を見つけたら、運がよいと思っていいくらいだ。

農村の共有地、共有物はどんどん荒れていく。お祭もすっかりさびれた。農村は、まるで、コンクリート・ジャングルのように味気なくなった。「隣の人はなにをする人ぞ」という都会の無関心が伝染したかのようだ。逆に都会では、団地などで、住民組織や隣組制度が流行し、村のような共同体意識が生れつつある。バラバラになった農村で、規模拡大した大型農業を集団でやる可能性は残っているのだろうか。

9 ————— 空転する対策

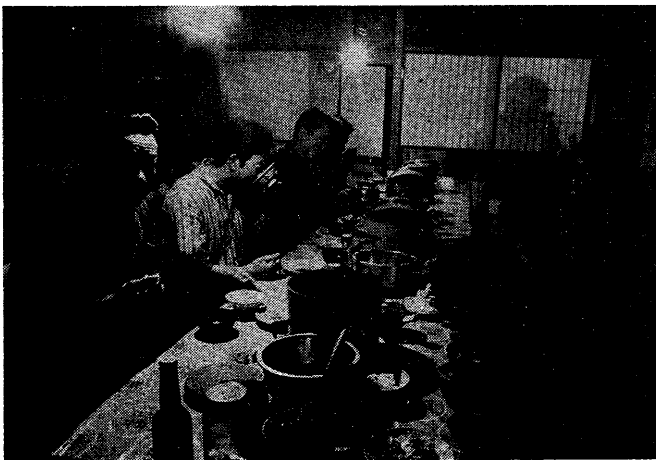
秋田では、36年から200社以上の工場を誘致して出稼ぎ者の地元就労をはかった。しかし、出稼ぎ者は、ふえこそすれ、減ってはいない。当然である。平均年齢40歳以上で、半年間しか働けない。不定期的に出稼ぎ労働力はどんな工場にとっても好ましくないからだ。誘致工場は、中・高卒の安い労働力と、パートの仕事をする主婦を求めて、農村に進出してきたので、出稼ぎ者を雇うために来たのではない。

従業員千人という自動車部品工場が誘致された時地元は大歓迎した。約300人の出稼ぎ者が何人かは働けると期待した。しかし、結果は期待通りには進まなかった。本工は高卒の若者、40歳をすぎた出稼ぎ者には、臨時雇いしかない。本社の工場に出稼ぎしていた経験者には、就職の道は狭かった。

誘致工場で、地元工場が出来ても、出稼ぎが、日稼ぎに変わるだけで、実態はまったく変わらないと

いえる。自宅に近いことで、労働環境は多少変化しても、本業の農業を片手間仕事にしなければならぬ点では、日稼ぎを恒常化することで、むしろ問題は大きい。いっそ、出稼ぎ者に技能を身につけさせ、プロの労働者に変身させようというのが、昨年からはまったモデル職業認定制度だ。出稼ぎ中の仕事を実習に流用、休日に講義を受けさせ、職業訓練校生と同じ資格を認定する。技能を身につければ、身分も安定、労働者として安定した地位もできるというねらいだ。現在の行政では、画期的というこの制度に、残念ながら、出稼ぎ者はそっぽを向いた。13企業300人の募集に対し、応募は6企業53人とどまった。同じ趣旨で始まった農外職業訓練を受けた人も45年度から48年度前期までで644人。これは、出稼ぎ者が、農業から転業することにまでは踏み切れずにいるというのが、本音のためとみるべきだ。秋田県出稼対策室がまとめた、49年度の対策は、「明るく安全な出稼ぎ」を進めるため、①職安経由の集団就労②技能訓練の実施③事故防止と健康管理④不払い賃金の立替え、などがあげられている。これには、出稼ぎを解消しようという視点はまったくない。「出稼ぎは悪」という考えがない限り、このような対策は、実もなく、単なる出稼ぎ奨励策になるのは目に見えている。

出稼ぎ飯場の食事



△横浜市南区▽

こんな中で、出稼ぎの犠牲者だけは着実にふえている。表5は、会員4万4千人の出かせぎ互助会の会員だけの数字で、県内の出稼ぎ者が7万人をこえること、会員以外の方が危険度の高い職場で働いていることを考えると、実際の出稼ぎの死者は、200人をこえるとみられる。これは、県内の交通事故死者を上回っている。交通戦争という言葉があるなら、まさに、出稼ぎ戦争といってもおかしくない。

とくに、病気による死者がふえているのは深刻だ。出稼ぎ者が、病気を知りながら働きに出る例が多いのは事実だが、それを出稼ぎ者の自覚が足りないせい、と結論するのは問題だ。病気でも働かざるをえない状況をなくすことこそ、国や県でやるべきでないか。出稼ぎ地帯の医師の一人が「検診で要注意とでると、出稼ぎ者は悲しそうに『それだば、なんとしたらいいすか』と訴える。経済的理由で、出稼ぎをやめられないのだ。みすみす病気を黙認せざるをえないことが残念だ」と話していた。健康管理には、それ相応の社会福祉的な裏付けが必要だと思う。

毎年、出稼ぎ者の平均年齢が1歳ずつ上っていく。そのたびに、病気は悪化していく。

表-5 出稼ぎによる死亡者と原因

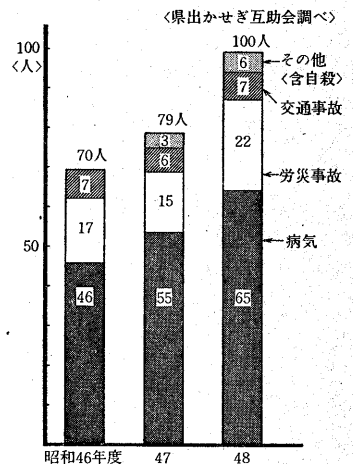


表6は、4年間に、8回の検診を連続して受けた出稼ぎ者、103人の血圧の変化だ。45年8月と、49年4月を比較すると、出稼ぎ後に高血圧がふえるパターンのくりかえしの中で、症状が重くなっていくのがはっきりと出ている。この傾向は、出稼ぎ者が、ゼロになるまで続くのだろうか。

僕が働いた飯場でも、何人かが薬のビンを持っていた。医者のかくれた内服薬を毎朝飲む人もいた。都市労働者と違い、家族と遠く離れている出稼ぎ者の場合、体の異常が見つかったも、病院に行くのはむずかしい。病院が近くなる、労働時間がはっきりしないことが、通院時間をなくすからだ。

表-6 出稼ぎ前後の高血圧者数

調査時期	血圧区分		
	高血圧	境界域血圧	正 常
出稼前 S 45.8	12.6%	19.4%	68.0%
" 後 46.4	22.3	21.4	56.3
" 前 46.8	15.5	28.2	56.3
" 後 47.4	16.5	21.4	62.1
" 前 47.8	15.5	17.5	67.0
" 後 48.4	15.5	22.3	62.1
" 前 48.8	16.5	22.3	61.2
" 後 49.4	22.3	19.4	58.3
出稼前計	15.0%	21.8%	63.1%
" 後計	19.2	21.1	59.7

注>横手市、平鹿総合病院、農村医学研究所

11 專業農家への道

出稼ぎは、農業問題だ。農業で自立できないからこそ出稼ぎが出てくる。病気、事故、留守家族などは、出稼ぎの一つの症状でしかない。一番いい出稼ぎ対策は、だから、出稼ぎを拒み、農業で自立することだ。

そういう道を選んだ、何人かの農業青年が秋田にはいる。雄勝郡稲川町川連、長里昭一さん<32>井上直一さん<27>は酪農と米作をやりながら出稼ぎのない農業をめざしている。平鹿郡大森町川

西の高安進一さん<25>ら五人のグループ「川西農産」も、周到な市場調査の上、完全協業制の農業を始めた。20ページほどの事業計画書には、五人の著者が農業にかけたすべてがある。「これがつぶれて、乞食しても悔いはネエ」といいきる彼らには、自分たちの試みがつぶれた時は、日本の農業がつぶれた時だ、というしたたかな自信がある。北秋田郡鷹巣町綴子、宮野方臣さん<35>も、牛乳の販売経路を開拓している。中国の農村を視察した宮野さんは「自分のやり方はまちがっていないという確信ができた」と明るく話している。

拒んでいる男たちの試みが、必ずしも成功しているとはいえない。しかし、今の農業をめぐる情勢の中で、出稼ぎを拒めるのは、採算の合わない、こういう一見馬鹿げた試みでないだろうか。出稼ぎで降るカネでは、專業農家をめざす決意は買えないはずだ。

彼らの心の中には、出稼ぎに対する憎悪がブスブスと燃えつつけている。農業を踏みじり、農民に出稼ぎを押しつけるものに対する怒りは、消えることがない。

若い友人が、出稼ぎ先の青函トンネルで死んでいった。井上さんが書いた追悼文は――

「なぜ出稼ぎに行かねばならないのだ。…農業だけで生活することを許さず、一家そろって生活することも許さない。子供から、父ちゃん、母ちゃんを奪い、じいさん、ばあさんに重労働を強いる。それでもあき足らずに田んぼも命も奪っていく。一体だれが考えて、だれが請け負って、だれが下請けし、だれが末端で進めているのだ」。

深く静かな怒りに支えられた、青年たちの專業農家への試みだけが、出稼ぎをなくする唯一の道である現状。これを拓げることはできないものか。

30年たつと、出稼ぎはなくなるという見方がある。高卒は、農業以外に進み、労働人口は、新しい産業構造に定着して、産業間の労働力の変化はほぼ安定する。その時、現在40歳台の出稼ぎ者の平均年齢は70歳台に上がり、その多くが、働けなくなり、出稼ぎをやめるといふのだ。しかし、30年間、出稼ぎが続く限り、犠牲者はふえつづけるだろう。これを、一つの過渡期の現象として片付けていいのだろうか。

秋田では、選挙があるたびに、出稼ぎのない生活という公約が出る。しかし、なにも変わっていない。なくするのはムリだ、という県民全体の暗黙の了解ができていようだ。そのくせ、新しい開発計画は必らず「出稼ぎ解消」をうたっている。鉄鋼プラントをはりつけようという秋田湾大規模開発計画は、工業出荷額が年間1兆円を上回れば、10万人の労働力が吸収でき、7万人の出稼ぎをそっくり吸収できる、とみている。しかし、小畑県知事本人が「出稼ぎ労働力は期待できない」とみている。

こんな状況が続くかぎり、出稼ぎは絶対になくなるらない。ムード的な農業見直し論が出ているが、相変わらず、兼業農家はふえている。農民の心は、もうすっかり農業から離れたというべきか。

農業で自立できる態勢を整えることが、日本農業にとって急務だといわれる。それは、出稼ぎを根本から解決するための、ほとんど唯一の道でもある。

× × ×

この原稿を書くのはつらかった。出稼ぎの取材を始めてから、出稼ぎをめぐる情勢は一層深刻さをましている。解決への歩みは、ほとんどなく、僕自身も、実態を報告した時点から、一步も進んでいない。無力さを再確認するだけだ。出稼ぎの連

載が終わった時、すべてが、新しく始まった。これからも、出稼ぎをめぐる問題を、執拗に追って行きたい。それが、僕自身の課題でもある。

一つの詩の引用を許してほしい。

父うかえせ

雨えっべ降ればえ

雪えっべ降ればえ

雪はやくければえ

雪ければ

父うくるがら

とじねもん

とじね、とじねもん

ええ服だの

んめえもんだの

じっぱりかってくるべども

父うかえせ

<とじねもん=さびしいもの、

じっぱり=たくさん>

<朝日新聞秋田支局員>